

浄土

四月号



昭和十年五月廿日 第三號郵便物認可 (毎月一回)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授受認可第三五二號)
昭和四十年三月二十五日 印刷 昭和四十年



第三十一卷

法然上人鑽仰会

首館

みかえり阿彌陀如来

永観堂禅林寺蔵

東大寺の大勧進を果した永観律師が、京都に帰ろうとした時、この阿彌陀さまが夢枕に立って、われをもつて行けというので、背負って帰ろうとした。これを伝え聞いた東大寺の坊さんが返せという。返そうとしても背中から離れなかったので許されて永観堂に移した。毎夜、律師は念仏を唱えて行道していると、阿彌陀さまが壇からおりて、律師の前と一緒に歩かれた。びっくりして立ちどまると、とたんに振りかえって「永観おそし」と言われたそのお姿が、この「みかえりの阿彌陀」といわれるゆえんだと伝えている。

横向きの仏像は円空仏だけを除けば正規のものでは日本ではだひとつではあろうが、この伝説は、み仏のやさしげなお顔とともに親しみがわいてきて奥ゆかしい。ひとりぼっちだとやるせない孤独にうちひしがれていた者に、お前をちゃんと見守っているぞ、決してひとりではない。ほとけがともにおるではないかと勇気づけ、見守られている自己、永遠のいのちにつつまれている自分を知る、すばらしい伝説でもある。仏像のありかたを教えてくれるこのみ仏は、その温顔とともに私には忘れることができない。

(石上善応)

— 目 次 —

巻頭のことば 平和への感謝		(1)
随想	 上田貞雄・宮林昭彦・河合健	(2)
御忌の俳句	 林 竜淵洞	(4)
浄土問答 病気と念仏	 藤井 実応	(6)
一言法談 仏いますが如し	 渋谷 賢応	(14)
近世文名録 鈴木在念僧正	 高橋 良和	(10)
幸せに生きる	 小山桂一郎	(18)
御忌唱導師嚴修に当りて	 藤井 亮彦	(21)
— . — . — . — . — . —		
浄土のこよみ	 大橋 俊雄	(12)
仏教人生訓 余地のある生活	 宝田 正道	(22)
学園訪問 樹徳高等学校		(16)
信玄と家康の念仏	 鶴田 湛泉	(24)
ご法語をいただく		(9)
新会員紹介		(21)
書評 金光上人		(32)
日本浄土教物語 平安末期の浄土教	 鈴木 成元	(28)

往生は念仏の信否にあるべし。更に
罪惡の有無にはよるべからざるなり。

法然上人御法語



平和への感謝

桜花爛漫と咲きほこり、天地に生氣の満ち溢れたこの月、釈尊と宗祖法然上人のご誕生の月である。仏教徒として、また浄土門徒として、ここに生きることが喜び、感謝のまことを捧げたい。とにもかくにも、平和の中で、それぞれの生業に励み、楽しい生活を送り得ることを、幸福とせねばならぬ。

ひるがえって、目を世界に転じてみたい。世界とまで言わなくてもよい。すぐ近くのヴェトナムを見るだけでもよい。そこでは、毎日同胞相食む死斗が、列強の谷間で、何の為に闘うのかその目的さえも分らず続けられている。其処の住民の大半は仏教徒であり、平和を愛好する人々である筈である。

仏教徒の指導者の一人であるトムザク師は、つい最近まで、増上寺に止宿し、椎尾法主の徒弟として、大正大学に学んでいた人である。彼は大衆を前にして叫んでいた。「もう、同胞同志殺しあうのは止めよう」と。その通りだ。

余りにも身近かなヴェトナムのこの動きを、無視してはならない。それにしても、ここに平和と幸福を味わうことを、われわれは改めて感謝せねばなるまい。

正しい精神的支柱を

上 田 貞 雄

(鎮西学園長)

この頃は、自由解放過剰で、勝手に理窟をつけ、もっともらしく云っているが、その内容は非常な矛盾を感じることが沢山ある。

例えば、平和と叫んで、暴力を否定する声の裏に、実力行使と名を替えて、暴力を行っているという大変な矛盾がある。

自分の思うまま、暴力をふるっていたのは数千年も数万年もの未開時代の野蛮人のすることであった。

今、日本を野蛮時代とは誰も思わない、否文化国家と自負している時代に、日中、公々然と、都のまん中で暴力沙汰が行なわれているこんな矛盾があろうか。

人類は、万物の上に君臨して、地球上に、素晴らしい文化の花を咲かせていながら、人を殺す武器は、まだ捨てて居ない。捨てるどころか、益々、研究に研究を重ねて、精巧なものが造られ、遂に人類撲滅の一大悲劇の一

哲学者 田辺元の晩年

宮 林 昭 彦

(大正大学助教授)

時はゆく 時はゆく 時は逝く

あはれ悲し

君は 君は 君は 別れ あはれ悲し

あはれ悲し 別れ 別れ

ふところに火を抱く山の静けさは

人の心の鑑にぞある

月に一二度、私は碓氷峠を越して信濃路を往復する、あの雄大な浅間山を根にひろがる山麓の大自然のすがたを目にすることに、この言葉を思い出す。これは哲学者田辺元が戦後間もないころ、即ち昭和二十二年の秋に書きとめたものである。かれは、北軽井沢に移り住み、浅間山麓のきびしい四季の変化の中で、体の弱い妻が病についてからとくに気持ちが大きく変化したようである。

その上、戦争末期のいらだたしき、敗戦の

親の自信喪失

河 合 健

(万告社 営業部長)

現在の親たちは自信を失っている。なぜ失ったか。敗戦によって自分を支えてきた価値体系が崩壊し、新しい民主的価値体系にはなじめない。そのせいだ。いや現在では個人は大きい組織の末端の一断片にすぎず、そこでは人は、自分の社会的存在理由を発見できないからだ。いや、もっと根本的で、もっと単純な原因である。欲望は増大して行っているのに、収入ははるかに足りない。それが無力感をさそうのだ。いや、日本の社会全体が理想を失っているからだ。等々いろいろの意見がある。

ともかく親は新しい時代に対応できず、新しい環境の中で育った子どもをどうとり扱ったらよいか途方にくれる。流行にのって無暗やたらに大学へ、それも一流大学へという至上目的をもっている。口ぐせのように「勉強しなさい」と強制はするが、その強制だけで

歩手前まで来ている。核兵器の研究發明がそれである。

平和の美名の下に隠れて、何という矛盾であろうか、将又、これが人類の宿命であろうか。

むしろ野蛮人の戦争が、単純で罪がない。現代は文明の衣の中に、野蛮の心を秘めて、表面を、つくろった仮相平和の時代である。

科学の進歩を口に叫びながら、未開人と同様な不合理な迷信を信じて、その迷の心を洗うことの出来ない人が、予想以上に多いのも日本人の大きな矛盾であろう。

人間の心の奥底には、全く矛盾したものがすんで、日常生活の中に暗躍して苦しみ悩んでいるのではないか。

わが国は、奈良平安鎌倉の各時代を経て江戸末期に至るまで、仏教、儒教の教が国民生活の中に入って生活感情を指導育成して来たが、明治以来、文明開化の強風に吹き巻かれ物質文明の花の色に目移り、国家に正しい精神的支柱がない証拠である。どうすればよいか。

社会にあたえた痛手も、直接身辺に感じていたにちがいない。

つぎの時代を後進のためにと考えていた折から、若い弟子たちがつぎつぎと戦争にかり出されて行く——常に将来を洞察した思索を中心に創造してゆくかれの觀念の中には、いくら否定しようとしてもできない淋しさが多分にあった。

一見、禅僧のように自己にきびしく、常に試練と思索のなかにあっても、やはり弱い人間の一面をどうすることもできなかったことであろう。どうしても、他人にはいえぬ淋しさ、やりきれなさが、時に身をさいなむこともあったと考えられる。かれは、また、

周期的に、前後の見境なく、夢中になって癡癡をおこす。そして、すぐあとで後悔して「おさえようとしても不可能なのだよ」と、もらされたとも聞く。

一哲学者の晩年の人間的な深層の面にふれて、哲学の領域から宗教の世界へふみこんでいた、かれの面目を偲ぶのである。

はうまく行かないことは判っているし、経験的にもそう悟らされる。何とか自然に子供をそのルートにのせる方法はないか。そういう目的で、家庭教育とか児童教育の仕方についての本を読んだり、話を聞こうとする。サラリーマンが「出世術」を求めるのと同じである。

子どもをこのルートにのせようとする努力を愛情と思いこんでいる。愛情をどう表現したらよいかという疑問を、本当の子どもへの愛情から出している親は極めて少数であろうだから答えは極めて簡単である。愛情があれば、言葉も態度も自然に生れてくるのだ。技術はいらない。もっとも子どもが小学校高学年になると技術は必要になる。だが、その技術は教わるべきものでなく、幼児時代からの本能による訓練の中で自得されているはずだ。母親は子どもと一体不可分な感覚をもつ自分で自分に話しかけるのに技術がどうして必要なのか。この自然の本能を大切にせず、妙な近代感覚や技術でそれを駄目にしてしまっているからいけないのである。もっと自分の自然な愛情を大切にすることである。

御忌の俳句

林 龍淵洞

浄土宗の開祖法然上人の忌日法要が『御忌』と云われています。一般の忌日に対して特別に法然上人の忌日法要だけがなぜ『御忌』とよばれたのでしょうか。

それは後柏原天皇の勅令によって京都の知恩院ではじめて行なわれたからなのです。

法然上人の正忌日は『法然上人行状絵図』第三十七の詞書に

「建暦二年正月二日より上人日来不食の所勞増氣し給へり。

(中略)

廿三日よりは上人の御念仏あるひは半時あるひは一時高声念仏不退なり。二十四日の酉尅より二十五日の巳時にいたるまでは、高声鉢をせめて無間なり。(中略)二十五日の午尅よりは念仏の御こえやうやくかすかにして高声はときときまじはる。まさしく臨終にのそみ給とき、慈覺大師の九条の袈裟をかけ、頭北面西にして、光明遍照十方世界念仏

衆生攝取不捨の文をとなへて、ねふるかことくして、息たへたまひぬ。音声とまりてのち、なを唇舌をうごかし給事十余反はかりなり。面色ことにあさやかに、形容えめるに似たり、建暦二年正月二十五日午の正中なり。春秋八十にみち給。釈尊の入滅におなし、寿算のひとしきのみにあらず支干又ともに壬申なり、豈奇特にあらずや。惠燈すてにきへ仏日また没しぬ。貴賤の哀腸する事考妣を喪するかことし」

とあります様に旧暦の一月の廿五日。

その場所は、同じ「法然上人行状絵図」第三十六の詞書に『慈鎮和尚の御沙汰として大谷の禪房に居住せしめたまふ。(下略)』

とあり、その禪房は、同じく第六の詞書に

『(上略)大谷は上人往生の地なり。かの跡いまにあり、東西三丈余、南北十丈はかり、このうちにたてられけん、坊

舎いくほどのかまへにかあらんと見えたり。その節儉のほともおもひやられてあはれにたたくそ侍る。いまの御影堂の跡これなり。』

とありますから、法然上人は、今の知恩院の勢至堂の地で御臨終を迎えられたのです。

それで、知恩院はじめ浄土宗の各寺院では一月十八日の夜から二十五日までの七昼夜、御忌の法要を営んだのです。しかし今では四月十八日の夜から一週間ということになっていきます。それは維新後のことで、行楽に適した季節を選んだというのが主な理由の様です。

御忌は京への春の前ぶれであり、老若男女、善男善女の知恩院への参詣人が極めて多いのです。

○

お正月に御忌が行われた頃は、御忌が年の初めの仏教行事でした。

知恩院の十八日の夜は「経の紐解」と俳句の季題にもあります様に阿弥陀仏を誦し、行道を修し、末寺の僧侶はこの夜から本山に参籠して七昼夜の大法要に随喜して、元祖上人の報恩謝徳をしたものです。

旅靴さげて出仕や御忌の僧

八桂

この春のはじめの大法要への参詣人は多く、昔、京ではこの日を一年の遊覧の始めとして、「弁当始め」と云って、お弁当持参で寺詣りを遊山を兼ねて行ったものです。

嫁入せし娘も多し御忌詣

太祇

また御忌はさうした人とのたのしみの一つであり、この日の参詣人はみな綺羅をかざったので

松風に紅裏かへせ御忌詣

青々

また俗に「衣裳競べ」とも云われ、京の着倒れの諺そのまに、或は「御忌小袖」とも云われ、いまでも知恩院の御忌ははなやかです。

御忌戻り小袖たたむや京の宿

露石

○

知恩院でうち鳴らす鐘の音をきかないうちは、京の人達は正月気分になれなかったと云うところから御忌の鐘の季題が生れたのでしょう。

御忌の鐘響や谷の水まで

蕪村

今日では春たけなわの知らせです。あの大鐘から打ち出される鐘の響、春はまっ盛です。

御忌の鐘詣で下りの道すがら

秀峰

祇園の夜桜も散る頃です。

病 氣 と 念 仏

藤 井 実 応

(浄土宗布教師)



大学を卒業して中学の先生になってまもない人が中心になって、二十代の青年男女の別時念仏会が三日間（朝晩）某寺で開かれた。その第二日目、その中心になっている人が、「私の母に元気をつけてやって下さい」と申されるので「どうしていらっしゃるんですか」とたずねると、「終戦後間もない頃でしたが、梯子段から、ずれおちたのが因で半身不随となりましたが、最近又病気をして——もうなおったと私は思うのですが、母は十分間位しか座っておれないので、ねたりおきたりして留守番をしており、気もちがくしゃくしゃしているのです、明日お寺へつれてきますから、元気をつけてやってほしいのです」「サア、元気をつけられるかどうか分りませんが、おあいしましょう、御不自由では、こちらから伺いましょうか」「イエ、明日私が寺へつれていきますから」とて、その青年は帰られた。翌日夕方自動車で来られた。控室から

見ると、そのお母さんは半身不随の為、息子さんの肩にたかまって車を降り、不駄もはかせてもらっているのがあった。

私の控室に來られて「失礼します」と不随の方の足を投げ出してお座りになった。「御不自由なことは承知していますから遠慮なく横におなりなさい」といったが、これでよろしいといわれる。さてこの方にどうして元気をつけてあげるかとができれば、私にそんな力はない、又どういいうお話をしてもよいのかも分らぬ、私は先ずその方の心もちを聞かしてもらうほかはない。

「あなたは今、何が一番気になっているのですか」とたずねると「私の末男が小学四年生ですが、身体が弱いので、私がかんないからだです、もし今死んだらあの子はどうなるのであろうと、あれを思いこれに思ひ死ねにも死にきれぬような思いがいたします」といわれる。親としての慈愛の心

が、かくも自身を悩ましているのであろう。私はその悩みのあり処が分ったように思われたので次のようなお話をした。

「あなたのお話を承って、あなたのお心、親としてのお心、まことにありがたく、私にもお心が分るように思います。あなたも今迄み仏の教えを聞かれて、御承知のことと思います。私共お互に、こうして生きていることは、自分の力ではなく、如来のみめぐみとみ力によって生かされて生きているのですね、あなたも如来のみ恵みによって生きているのであり、お子さんもまた如来のお力の中に生きています。生も死も私の力ではない、生かされて生きているのであり、またそのお力の中に死なされてゆくのです。お子さんは親の慈愛の下に育ってきたのですが、その根本は如来のお力です。アミダ如来は私共の真実のいのちの親であります。あなたの生死も如来におまかせ申し、お子さんのことも如来におまかせ申す、親さまである如来は、よろしいようにおはからいます。それが念仏の心でしょう、どうぞあれこれと思ひ煩わないうで念仏の中に、如来よろしいようにおはからいます。下さるとおまかせしてお越し下さい」

私はつづいて次のようなお話をした。

「だいぶん前のことですが、私の先輩で、宗教大学を卒業

の前にロクマクと肺炎を患い入院しました。四十度位の高熱がつづいて、なかなか熱も下らぬ、院長さんが、病人の郷里は九州で遠方でもあり、重態だから電報で報せるがよいといわれた、恰度その時に近代の大徳、山崎弁栄上人（光明会祖と仰がれる）が病院に來られた。病人に「あなたも仏教を學ばれて御存知のように、あなたの力で生きているのではない、如来のみ恵み、み力によって生かされている。すべてを如来にまかせて念仏の中に養生なさい。あなたも如来まかせ、あなたのお父さんお母さんも如来まかせ、この弁栄も如来まかせ、如来さまがよろしいように、おはからい下さるか」と御見舞下されて、サッとお歸りになった。すると不思議にもそれから熱が下りはじめてぐんぐんと恢復し全快された、その方は今も健在で、多くの人々を念仏に導き、念仏の生活をしておられます。弁栄上人お見舞の御言葉によって、心の中のわだかまりがとけて、新な心になった、それがすぐからだにも影響して熱が下ったのでしょうね」

そんなお話をしたりしていると、そのお母さんの顔が明るうなってきたのを覚えた、私は最後に法然上人の法語（後記）をお話した。

いつのまにか一時間ほど過ぎ去っていた。十分間ほどしか座っておれない病人さんが一時間も坐りつづけておられたの

で無理があつては後が心配しかも青年への話の時間が来たので「お大事に」とお別れしたのであるが、その方は青年への話も聞いて帰られた。私は翌朝帰宅した。数日後、その青年から「あれから見ちがえるように元気になり、昼の間も殆ど起きているようになった」とよろこびの手紙を受けとった。

数ヶ月後、そのお母さんにあった、ほんに見ちがえるように明るうなつておられた。「先般お目にかかった時、如来さまがよろしいようにおはからい下さるとのお言葉が特に有難く、それから楽になりました」といわれて、私はまた改めて、その念仏の心——まかせたる身の安らかさ——を味うのであった。

その事を私の友人の医師に話すと、「恐らくノイローゼになつていたのであらう、よくそういうことがある、本人は気づかないノイローゼ患者がたくさんある、気分が一転すると速座になおるものだ」と教えられた。

法然上人法語

宿業というて前から自身の行為をつみ重ねた結果、受けなければならぬ病は、どんないろいろな仏や神にいのつても、それによつて病がどうともなるものではない。いのることによつて病も止み、命も延べることができるならば、誰かは一人として死ぬる人があらうか。まして又仏の御力は、念仏を

信ずるものを、転重軽受といつて宿業によつて重く受くべき病を軽く受けさせたもうのである……

されば、念仏を信ずる人は、たとい、如何なる病を受けても、みなこれ宿業である。これより重くこそ受けねばならぬものを、ほとけの御力にてこれほどに受けることが出来たのであると受けとつて、養生することができるといふのである（浄土宗略抄）

法然上人は八百年も前に、すでにかようにハッキリと病氣と宗教（念仏）との関係を明かにし、迷信にならぬよう正信のあり方を示された。宗教は病氣なおしではない、生命の根源的な要求を現わす、全生命の救いである。それゆえこの信念にある時、病氣も転重軽受されるのである。病も、災厄も、喜びも、悲しみも、念仏で一貫する。受くべきものは念仏の中に正しく受け、念仏の中に処しゆく、明るい、安らかな力強い念仏生活を教示下されたのである。

仏大講師

岸 覺勇 著

新書版 百頁

定価 二百円
送料 二十円

「いかにして浄土宗を現代にいかすべきか」

発行所 三重県四日市六呂見町 観音寺中

記主 禪師 鑽仰会
振替 名古屋 四〇一二番

二 法語をいただく

往生は念仏の信否にあるべし。更に罪惡の有無にはよるべからざるなり。すでに凡夫の往生をゆるす。なんぞ妄念の有無をきらふべきや。

（諸弟子との問答）

ある日、安樂房は鎮西上人を初め二、三の高弟子と一緒に法然上人からいろいろ教えを受けていました。阿弥陀さまの本願力の偉大さ、有難さについて諄々と説かれる法然上人のお詞には、お弟子たちの心がますます明るくなってゆきました。お念仏の功德には涙の出る程嬉しい思いがしてきました。

しかし安樂房はお詞を聞きながら、しきりに自分が省みられて、こう質問しました。

「それでも私のように常に妄念に悩まされ、不真面目な者でも往生できるでしょうか」

すると法然上人は「もちろん往生できると断言されてから更に、往生ができるできないということは、念仏の功德を信ずるか信じ

ないかによって決まるものであります。その人に罪惡があるかないかに関係するものではありません。何故なら阿弥陀さまは凡夫といえどもお念仏を唱えるものを往生させると誓っておいてになる以上は、妄念のあるなしを問題にしないのが当然でありましょう、と答えられました。

安樂房は建永元年十二月に住蓮と共に鹿ヶ谷で別時念仏会を営み、六時礼讃を修しました。この法会が世人に多くの感動を与えました。ここで幾人も人が入信しましたが、中でもひそかに参加していた官女たちが入信し、出家しました。ところがこのことが後鳥羽上皇の留居中のことであり、官女が無断で出家したことが、上皇の逆鱗にふれることになりました。更に念仏停止を主張していた人たちのさん訴にあつて、安樂房は住蓮と共に捕われ、遂に六条川原において斬せられました。安樂房は川原に立って礼讃を誦し、お十念を唱え、悠々と刑に服し、見る者をして随喜の涙を流させたことは有名な話であります。

後白河法皇は上人に帰依し、熱心な念仏行者でしたが、その法皇の追善法要において安樂房は住蓮等と一緒に初めて六時礼讃を修しました。また隆信朝臣の病重しと聞かれた上人は、安樂房と住蓮を派遣して善知識とされました。その他、上人が選撰集を著されるに際して、安樂房にその筆記を命じられました。またいかにさん訴されたとはいいながら、念仏停止の血祭りに処刑されたということは、当時の社会における著名な念仏行者であつたとみられましょう。

このような安樂房が「私如き妄念の多い者までも」と上人に質ね、それに対して答えられたお詞が、この法語であるところに、この法語の意味が特にあります。

自分は罪深いか、自分の罪は軽い等という判断によって往生が決まるものでありません。要は信ずる心があるかないかによるのであります。

「妄念余念をまかへりみず。散乱不浄をいはず。唯口に名号を唱よ。もしよく称名すれば仏名の徳として妄念おのずから止み、散乱おのずから静まる」のであります。（村瀬秀雄）

鈴木在念僧正

高橋良和

(中外日報取締役)

山羊ひげのお
じいさんという
とすぐさま鈴木
在念僧正を思い
出す。小柄な人
であつたし、あ
の独特のしわが
れ声が印象的で
あつた。

東京都江東区
深川心行寺の御
住職であり、晩
年は増上寺執事
長であつたし、
宗会議長や東京
教区長などの要
職を経ているの
であるから、宗
門的には一級品
の僧正さまであ
る。

あの気性だと東京では好き嫌いをいってのけるから江戸
っ子風であっさりしていただろうが、ねちっこい関西の人
から見ると、随分と思ひ切りのよい、そして割り切りの早
い、至極あっさりとした性格であつたようで、関西人から
すると、あまりはつきりしているのや或いは附合いくい
ような感じをうけたことも度々であつたが、御本心はそう
でもなかつたようである。

この鈴木僧正の在世中はまことに気の毒にも、浄土宗が
二つに分かれていたという不幸なときであつて、この僧正
もその合同一本化に努力されたのである。自分は宗会議長
であるし、或る一面においては関東の寺院の代表でもある
ので、その当時浄土宗にあって組織されていた合同問題の
対策委員であつた関係から、同志と共に度々入洛していた
が、その度にわたしをつかまえては、「君——なんとかな
らんかなあ、いつまでもこれでは宗門が駄目になるぜ、一
本化出来ないのならもうそれぞれ分かれてはつきりと組織
づくりをやらねばダメだ、君はどう思う」とよく念をおさ
れたものである。

そして「いや——大丈夫です、合同は出来ますよ」とで
も返事をするや、座を乗り出して、「その方法はどうする
のか」となかなか熱心にたずねたが、ことがある一点まで

くると「それはダメ、やっぱり分裂してゆくより方法がない」その割切り方がいつも人より早いのがこの僧正の特長でもあった。

それは丁度昭和二十四年の五月十八日のことであった。

わたしは用事があって、夕刻近く知恩院の寺務所にいて午後五時頃になって本山の玄関を出てかえりかけようとしたときである。寺務所の門を出て、武家門の横を通り、阿弥陀堂の前から、正門に通ずる女人坂を下りようとして大殿の横までくると、あたりは静寂で誰一人いないひっそりとした境内であったが、ふとみると大殿の前に小さな老僧が佇んでいるのである。

本山の門限は疾くにすんで、御堂の扉はピッタリとしまっているときであるだけに、この老僧の存在は一寸異様だったのである。何か特別な筋合の方か、さもなくば田舎からの参詣の老僧かと思ひながら近よってゆくと、この老僧は人の気配を感じたのか、やがて二、三步下ったかと思うと、ふところからハンカチを出して、臉をぬぐったのである。夕やみのなかにひとときわ白いハンカチがわたしの眼にしみこむようであったが、だんだん近よってみてわかったのは、その老僧はなんと鈴木在念僧正であったのである。

僧正はわたしをみると、「なんだ君か」と安心したよう

に云いながら、高い本堂の段々をおりてくると、静かな声でいったのである。

「実はな——わたしは法然上人の前で泣いていたんや、お大師さま、まことに申しわけありません。浄土宗がこんなに分裂して、知恩院へも大ぴらでこられなくなりました。きっと合同いたしますから今しばらくお待ちください、とわしは申しあげたんや」

と、二、三度眼がしらを白いハンカチで拭いながら声がふるえていたのである。

あたりに人影はなく、この老僧正のこの決意は、大殿の奥深く鎮まります、御本尊の法然上人のお耳にも聞えたかのように感じて、そばで聞くわたしの心を打ったのである。当時僧正は合同促進のため対策委員であったから、それだけ合同への熱意も一入であったことがうかがえる。

この僧正は増上寺の執事長に就任してからもこの本山の本堂の復興にかなり強い熱情をもっていたので東上して会うたびに建築のことを洩らしていたが、然し不幸にして在職中には今日のような会館の建設がみられぬままに逝ってしまった。江戸ッ子かた気というのか、頑固まで自分の主張を通すだけに合同の熱情は一倍強く、知恩院大殿前のひとことが、この僧正の真面目でもあるように思えるのである。

浄土のこよみ

— 四 月 —

大橋俊雄



四月の声を聞くと、何となくうららかさを感ずる。桃は桜にとかわるが、菜の花も開くなどして、花の園はにぎやかになり、鬱鬱と芳ばしい香りをただよわしてくる。「花祭

を母として生れ、幼名はゴータマ・シッタラタと呼ばれた。仏伝の語るところによれば、夫人は産期の近づくにおよび、当時の慣習に従い故国に帰る途中、ルンビニー園で身を洗

いきよめていたとき産気づき、無憂樹のもとに行き、

垂れさがった花の枝をとろうとした時、右脇から安らかに生れたのがシッタラタであり、時に歩み「天上天下唯我独尊」と申されたという。

り」がはじまるのも、其の頃である。お釈迦さまは四月八日にお生れになり、法然さまはその前日の七日に誕生されたという。釈尊は中印度カピラ城に浄飯王を父とし、マヤ夫人

いたらしく、甘茶をそそぐようになったのは江戸時代のことであった。灌仏会は早く推古天皇の十四年に、寺毎に四月八日齋を設けたというから、すでに聖徳太子の在世した頃か

らはじまっていたらしいが、宮中で行われた嚙矢は承和七年仁明天皇が静安律師を清涼殿に招いて修めたのがはじまりで、以来神事あるときを除いて四月八日の灌仏会は恒例となり、室町時代には民間風俗の一として村々の寺でもおこなわれるようになった。

長の日をかはく間もなし誕生仏 一茶
蝶々も来て乳を吸ふや花御堂 也有

吾家より寺なつかしき甘茶かな 柑子

法然上人は長承二年四月七日に生れた。今から八百三十二年前のことである。生家の西に二又の棕の木があり、その日紫の雲がたなびき、二流の白幡がとびきたり、天に鈴の音がひびきわたったとき勢至丸は誕生したという。父は漆の時国、母は秦氏。勢至丸は父の死後比叡山にのぼり、受戒して法然房源空と名乗り、以来叡空のもとでひたすら真理を求め、四十三才のとき専修念仏によって救いの道のあることを知った。そして一時流鏑の生活をおくったとはいえ、多くは京洛に住んで弘教につとめ、建暦二年正月二十五日、八十才を一期に世を去られた。従って「御忌」といえば正月二十五日であり、昔から此の日に

御忌をつとめていたが、明治になり海陸の交通が開け、全国の門末道俗の参詣がたやすくなる、わざわざ厳寒の、しかも底冷えのする京都で御忌をつとめなくても、暖かくなつてからでもよくないかという声もあり、明治

九年末知恩院の門主徹定が鹿兒島に教化したのが機縁になって、翌十年から陰暦正月を改め、陽暦四月に厳修することになった。八坂の桜がほころび、うららかな日よりの中に修せられる御忌は、「御忌小袖」の例にもまれず、綺羅をかざって参詣する婦女子の姿も少くない。昔は此の御忌詣での衣裳をみて呉服屋は、その年の流行を定めたともいわれる。増上寺では十四日より十六日まで、知恩院では十九日より二十五日までつとめられる。

難波女や京を寒がる御忌詣

穎村

着だふれの京を見に出よ御忌詣

几茎

さはいへど奥深し華頂山

嘯山

「御忌」といえば、通常は天皇皇后などのなくなられた忌日に行われる法会を指すのであるが、法然上人の場合は、大永四年正月十八日後柏原天皇が知恩院二十五世の住持職に

あつた超普存牛に鳳詔を下し、「宜しく京畿の門葉を集會して、一七昼夜、法然上人の御忌を修せしむべきなり」と申されたために、何のはばかりもなしに「御忌」という語を、今に伝え、ずっと用いてきたのであつた。

旧正月から陽春四月に改められた徹定のあつた。唐人お吉が血の涙でハリスにかしづき、辛うじて通商条約が結ばれたのもつかの間、世は明治維新となつた。明治の世は何もかも新らしいよそおいをもつて生れようとしていた。それは御一新といわれ、文明開化と呼ばれた。江戸幕府の宗教政策により、僧眠をむさぼつていた僧侶は三衣一鉢をすてて金殿玉楼に住み、樹下石上に大法を説いて休むことさえなかつた釈尊の行跡、日夜念仏の精進と弘教にあけくれした法然上人のみあとを忘れ、美酒佳肴によつて安住の生活をしていた。それが御一新となり、廃仏毀釈の荒波のなかに投げ出された。どうすることもなしにもがきつづけた僧侶は、識者の笑い草となつていた。恰かも仏教界がややもすれば地におちんとしていたとき、断固立ちあがつて正

法護持のために気焰をはかれたのは行誠であつた。彼の念頭にあつたのは維新を境に、地におちつつあつた仏教の復興であり、宗風の宣揚であつた。行誠こそは仏教を本道にもとし、日本の宗教を真の姿に立ちかえさせようとした恩人であつて、「東に行誠、西に徹定」といわれ、仏教界にそれぞれの立場において貢献したところ少くない。此の二人は、活動した場面こそ異なるとはいえ、祖山知恩院の復興につくされた人であつた。その行誠が明治二十一年四月宗祖法然上人の御忌奉修をす

ませた二十五日の御忌日に、くしくも世を去られたといふことは、恰かも歌人西行が何れ死ぬとすれば、釈尊のなくなられた二月十五日涅槃の日に、花のもとで死にたいものだといわれたことを思うにつけ、常に法然上人を思い、知恩院の復興につとめられた人として、御忌日に、しかも御忌の大役を果して世を去られたことは、行誠らしい往生だったといえよう。

四月下旬念仏狂言といわれる「壬生念仏」がはじまり、二十九日の天皇誕生日を迎えれば、早や暦は五月にところもがえする。

佛いますか如し

渋谷 賢 応

(諏訪仏教会副理事長)

お寺参りに来られたおかあさんが涙ぐみながら次のように語り出した。

「和尚さま、仏さまに魚や肉を進ぜてもいいもんでしょか。千秀ちひでがなくなってからもう十四年目になりますが、私はまだ毎日あの子と一しょにご飯をたべていますんですよ。変なもんですね、お魚でも肉でも、あの子には一番いい所をとってやりましてね。位牌に進んぜるんですよ。」

ええ、あれから妹が生まれました。それが不思議なんです。どうしてもあの子に生れかわってもらいたいと思いましたが、そうですね、あの子の命日は昭和二十四年の七月十八日でした。それでお腹の大きくなっていた私は産婆さんに、どうしてもその日に産みたいと申しました。そうすると産婆さんは笑って『出ものはれものとき知らずって言うじゃありませんか』って言うんですよ。それもそうだ。だけどこのお腹の子が、あの子の生れ代りであったとしたら、七月十八日に

生れなければと思いつめていました。そうしたらどうでしょう。日も時間も、そっくり同じだったんです。産婆さんも驚いて、『変なお腹だ』などと申ししていました。

それでも妹ができたので気持ちいづらか楽になりましたが、おかしいじゃありませんか。この妹が亡くなった兄ちゃんと兄弟げんかするんですよ、『かあちゃんには兄ちゃんばかり可愛がって、ちっともあたいのことなんか見てくれない』って。あんまり私が『兄ちゃんが食べてから食べなさい。おいしい所を兄ちゃんにあげなさい』なんて言うからでしょう。

ええ、もう生きておれば今年成人式なんですよ、この間もテレビで成人式が出て、それを見ていたら涙がとめどなく出て来ましてね。妹が『かあちゃん、兄ちゃんを見て泣いている。泣いている』などと言いましてね、はずかしいやらおかしいやらで。

テレビと言えばこの間から相撲をあの子に見せているんですよ。位牌を持ち出してテレビの見える所へ置いて、おかしいじゃありませんか、妹や父さんがそこへ行くと『ぼうやが見えませんよ』なんて言うんですよ。

夏なんかおにぎり持って野良に行ってもそれを露の葉にくるんで『これおあがりよ』って取ってやるんです。他人が見たらきつと気がいだと思うでしょうね。水なんか飲みたいときも自分ばっかでなしに、あの子にもやるんです。両手ですくって、『さあおあがり』って、一ぱいではだめだと思ふともう一ぱい。三ぱいもやっておいて『ぼうやもうこれくらいにおし、ポンポンがいたくなるからね』って、二十の子をつかまえて、ホ……………」

私は目頭を熱くして聞きほれていた。そこにはただお浄土があるのみだ。血の通っているお浄土が、十萬億土のかたならぬこの現実のこの家に。

○

「祭ること^い在すがごとし、神祭れば神在すが如し」とは孔子さまのおことばである。なき人を供養すると言うことは、在すが如くすることなのだ。心をこめて、尽すことなのだ。はるか彼方の浄土にまします方々を、此土のつとめとして供養するのではなくて、浄土にまします方々にこちらにおいてを願って、ご供養申しあげることなのだ。そうすれば、そこにただちに浄土が現れるのである。仏と膚を触れあうことによって、私たちは生き生きとしたお浄土を知ることができるのである。一たび浄土にゆかれた方々は、それはみなみ仏で

ある。その方々にはもう漏はないのだ。六神通の中の、最も難問とされる漏^あ尽^{じん}通^{つう}を得ておられるのだ。それがどんな方であつてもみなひとしく得六神通の方々であるのだ。

それが証契に葬儀の席で、年回法事の席で、それらの方々の話をせられるとき、みんなそれぞれの個性をもった菩薩方として、私たちに話しかけて下さるのをもつても知ることができる。

浄土教はここから出発しなければならない。浄土が此土である、彼土である。指方立相が、本体界が、よせよせ問答である。

私たちの肉親が、今現に血の通っている肉親が、生死をたびこえてここに在すと言う。それが菩薩の姿をもつてここに在すと言うことが、現実の、私たちの浄土観への出発点であるのだ。

孔子さまはまた「礼は奢^せらんよりはむしろつづまやかに、喪はおさまらんよりはむしろいたむ」と教えられている。いまだきの葬儀、法要において、この言葉をよくよく味わうべきである。

既成仏教の形式化、仏教者の葬式法事専門化、葬式法事の形式化、それらはすべてこのことより反省されなければならぬ。そしてそのことが、また浄土教への能入の門なのである。

仏教精神を打ち込む

桐生 樹徳高等学校

— 学校訪問 —



和を以って貴しと為す

争いを起さず 協力して事に当り

吾一人生きてゐるのではなく

互に生かされているをおもひ

ほどこして報いを求めず

奉仕こそ人生の喜びであることを

充分に体験し

更にはげみ真正への道を悟り

怠りは死なるを知り

常に努むべし

澄み切った朝の冷気を突いて、各教室から「信条」を合唱する声が響いて来る。男、女別々の校舎ではあるが、信条を唱える声は、一緒になって、学校の横を流れている川下へと、流れて行く。

桐生にある樹徳高等学校は、男女共で千五百人近い生徒を擁した、浄土宗関係の私立高等学校である。桐生と言えば、誰しもがすぐ思い当る群馬県の生糸の有名な産地であるが、今は十余万の人口を擁する大近代都市となっている。

元来この学校は、大正三年、当時浄運寺の

住職であった野口周善氏によって創立された

裁縫学校が前身で、当初は樹徳裁縫女学校と

言っていた。爾来五十一年、歳月の流れと共に

次第に発展し、終に今日に見る様な偉容を

見ることとなった。現校長野口健策氏は、創

立者の子息で理事長を兼ねて居り、兄の善雄

氏が、浄運寺の跡をついで、附属の明照保育

園長を兼ねている。川一つ隔てた向う岸に、

浄運寺のいかにもドッシリした本堂があり、

誠に学校周辺の景観はすばらしい。校地は、

ギッシリつまった校舎で手狭さを感じしめる

が、こうした環境は東京の都塵の中の学校等

とは比べものにならぬすばらしさがある。

「教育は、新時代に適應する以上に、新時

代を創造する人物を育成することにある

ます」

物腰やわらかに、いかにもゆったりと話さ

れる校長の温顔は、この校風を表象している

様である。

講堂は、まだ小さい。四百人も入ると、一

杯である。全校生徒を入れるわけには行かな

い。

「それでも、せめて卒業式は、やはり日頃道場にしていた此の講堂でさせてやりたいと考えています。市の公会堂という話もありますがね」

と校長はシミシミと述懐する。近い将来には全員入れる講堂を建てたいとも言われた。

正面に阿弥陀如来の立像を祀り、左に法然上人の画像、右に創立者の写真を飾った講堂正面の飾りつけは、如何にも仏教精神を基調とした此の学校の特質を、よくあらわしている。行きかう生徒のしつけも厳しいらしく、廊下を歩く客に対しては、丁寧に最敬礼をして行く。二月初めの訪問であったが、流石に桐生は北関東だけあって、寒い。

「各教室の暖房などは」

「いや、何もしていません。これも修養の一つです」

そう言えば、校長室もいかにも寒々としている。特別の客でも無い限り、余り暖房もせぬらしい。正に率先して事に当るといふ事であらうか。

「男の子供達には、冬でもオーバー無しです。特別身体の弱い場合は別ですが」

この物腰柔かな校長の何処にこの厳しさがあるのかと、一寸首をかしげた程である。これが、仏教的信念というものであろうか。この頃の子供は、余り甘やかされすぎている。自由でありすぎる。自己を律する事甚だ弱い。そうした教育を受けないからである。このまま大人になったら、どんな事になるだろうと思う事もある。別に厳格主義だけが好いわけではないが、こうした時期に、こうした教育を受けられる子供は幸福だなあと、今更の様に感じ入った。

みほとけに 乙女の心 はなとさく

やがてむすばむ 法の木の実を

これは、増上寺法主の椎尾弁匡大僧正が、この学校の為に詠んだ歌である。校長室の一隅に、ガラスケースに入れて飾られてあった。男子部が設けられたのは、昭和三十五年であるから、まだ日が浅いのであるが、この歌は、男子にも通ずるものである。

今日は、馬鹿に賑やかである。

「願書の締切日ですの」

成程、そう言えば、受付では随分な人が、うごめいていた。

「六百人取る予定ですが已に千六百人程来ています」

嬉しい悲鳴である。浄土宗関係には、こうした高等学校が、二十近くあるが、結構なこゝとである。この上とも発展を願って、再び校舎をみたら、木造建築と並んだ白いコンクリートの四階建の校舎が、目にしみる様に、冬の日を浴びていた。



幸　せ　に　生　き　る

小　山　桂　一　郎

(元大正大学講師)

私は仏教々育を受けた者ではなく、満足に仏語は使えないのだが、「南無阿弥陀仏」の称名ということを知ったのは、中年以後であった。尤もこれには縁といえはそんなこともあった。

それは、両親は、先生や生徒が荒っぽくなくてよいだろうとの推定で私をキリスト教の小学校へ入れた。ここでは、毎日毎日授業前と帰る前に、讃美歌と祈りをやったので、最初はただ口を動かしていた。小学校を出る前には、父親が「大学」「中庸」「論語」の素読を教えてくれて、大学の漢文を竹の棒でつつきながら、近所へ聞えるような大声で累加的に毎日怒鳴らないと、

お小遣い（といっても一銭か二銭）がもらえなかった。また小学校の校長さんが正文章軌範を読本の代りに教えてくれて、励まされるまま、白文を用いた。こういうわけで、神とか、天とか云っても、神が天を飛んでいるとも思わないのだが、私の心は、「今は、よくは、わからないが、もっと年を取ったら、こういうことを研究しよう」と思いつつ、年を重ねた。キリスト教の「神」も、漢文の「天」も、わからぬままに、頭にこびりついて、酒を飲むようになって、躍っても、奮声を張り上げても、私の精神生活には、わけがわからないが、何かしら尊いものが、くっついていった。それが、私に制裁の力を及ぼしていたように思う。

母の言に、「ある易者が、お前は、医者か、坊さんか、先生がよいと云った」とのこととで、その暗示とは、思えないが、私の性向はこの三者に傾いていたらしい。家は、代々漢法医で、家では、釈迦とか孔子とか呼びすてにせず、「お釈迦様」「孔子様」と云ったし、科学文明とかいう今日でも、私はこの呼称を用いないと、スッキリしない。

やがて、私は英語教師となり、十五年も経た頃、神保町で珈琲を飲みながら、人と語っている時、「世の中のことは皆現象だね」と、互に共鳴し合ったのは、私の頭は大分、仏教的になっていたためと思う。それから、菜根譚で感心したり

して、仏教中学を、続いて仏教大学を手伝った。そこでは校長さんから観音経をもらったり、般若心経の講義が手に入ったりして、いろいろな書物・雑誌を読んでいるうちに、八宗兼学的になって、頭のまとまりがつかない。どうかして、統一ある信仰をと願っていると、「仏陀が法蔵菩薩であった頃」なんという句に出会ってさっぱり、わからなくなりました。た。仏教者はわかっているのかと、疑がったこともある。

そういう混乱と仏教の流派にぶつかりつつ、私も年を老々てくるからという「あせり」もあったが、元来、夢幻的思想を喜ぶ私は、夕照の西方に浄土があるという考えに会って、とりこになって了った。科学進歩の今日、東西南北はないというが、固定的に考えると、そんな幻稚なことになるが、それは、ここでは申さぬとして、私はただ、ただ「念仏を唱えよ」という諸大家の言に従って、一切の迷を捨て、易行の阿弥陀仏信仰に踏み切ったつもりである。これは逃避であったかも知れないが、何も考えず、喰べることに、遊ぶことに、ばかり考えている大衆を思うと、私は助けられたのだ。誰れにもすすめられず、独りで決したのは生い立ちの関係であったと信ずる。そして両親と小学校の先生の縁を感謝する。私は、何もかも、念仏で終始しようと思ったから、歩いて、座っても、思い出次第に、胸中で念仏を唱える。

立小便しながらでもよいと思う。突然だから、「……ブダブツ」で始まったり、「ナム」で終わってしまったりする。が称名は半端でも心に安静を与える。

私は「お釈迦様」の説いた教えは、尊いものと思って称名にはいったのだから、お釈迦様と直取引だ。仏教の悪口を聞いても、何とも思わない。仏教たるものは汚れていない。キリスト教の外人宣教師が、日本の信者の一人を称して、「ライス・クリスチャン」（米のための信者）と私に云ったことがある。また仏教研究の某米人が、ある坊さんのことを「プロ坊主」（プロ野球の造り替え）と評したことがある。なんだ、かんだと評しても、仏教そのものは尊いのである。

然しながら、天気晴朗、花笑い鳥歌うの候に、不自由な生活と、健康体に恵まれていての称名は寝言のように「らく」でもあろうが、苦しい時、困った時の称名には切実さがこもる。自分のことを一例として挙げさせていたただけば、数年前、若い頃弱かったが、もう強い筈の私が喀血をした。絶対安静とて、床に入り、のどから込み上げてくる血を、拭いて、又拭いて、一回、又一回、合計十回位で、いずこともなく退いて行った。が、時間が経つと、又同じことが循環して、一昼夜約四回、五日続いた。数えると合計約二百回拭いた。手当の結果止まったが、自分の終りか、世界の終りか、

とさえ思えた。大霊と共にあるつもりで、ゆっくり心に称名を始めたものの、また迷った。昔、母がよく「法蓮華經」を唱えたことを思い出して、「あの方がいいのか」など、「觀世音ボサー」というのが、よいか、などと迷ったが、それを唱えると、血が乱れ出すように思われて恐ろしかった。考えると、私はこの宇宙に全く独りであった。生れたばかりの仔猫のように孤独・無能であった。どうしても頼るのは阿弥陀のみであった。莊子は「虚なれば静なり」と云ったそうだが、それにも増して、おのれを預けてしまふ外には、やりようがなかった。最後の到着所として阿弥陀様にかじりついた。あとは死んでもよい、ということであった。考えてみると、子供時代、キリスト教で出発して、中年の頃、二十六年も、キリスト教の専門学校を教えた私がキリスト教に入らなかったことは、その教えが、私という畑に育たなかったのだ。早くから学んだ漢文の情熱が、がっちりキリスト教を押えたので、この縁で私は、仏教になびいたと思う。

私は仏教諸派の形式や儀式は、世人がとかく非難するが、私は良しとして肯定する。それらは皆、壮嚴に寄与する。パブルでも、初めは、民衆の通俗ギリシャ語であったので安っぽかったと云われる如く、もしも、現代の青年男女の使う口語で仏教を説いたらどうだろう。私は「何とか学会」とい

う人々に入会勧誘を受ける側に居たことがあるが、そろそろそろって、病気がすぐなおるようなことを云うて、宗教を錠剤か何かのようにシャアシャアと云う無智の人々の度胸にはあきれた。

私は阿弥陀仏信仰は誰をも誘わず、独りで続ける。だが一言述べたいことは、世間の親御さん達は、その子供さんの教養にもう少し、精神的な面を加えてはどうであらうか。それがキリストでも仏陀でも、一般家庭で、宗教的形式を盛んにしてはどうか。たとえば毎朝、仏壇にお線香を上げる、ただそれだけでも非常な精神的効果をもたらすのである。中、高等、大学でも、宗教活動を加味することを求める。道德教科書を何冊つくっても、養老院を増加しても、セメントや物資が要るばかりで何もならない。近頃のテレビや、ラジオには、汚染要素がある。スポーツしかり、音楽しかり、遊びもしかり。しかるに一部の教師とか、上司とか云われる人々は、新しく思われ度くてか、若い者の氣に入るようなことを云うので、よろしくない。原子時代になり、宇宙時代にはいったといわれても、親が子供を慈しみ育てる心に、変りはない筈である。

私は親の誘導が良かったので、終点阿弥陀信仰という駅に到着したことを感謝し幸せにすごしている。

御忌唱導師嚴修に当りて

藤 井 亮 彦

(古河市正定寺住職)

四月十四、十五、十六の三日間、東京、芝、大本山増上寺に於て、元祖法然上人御忌大法要が嚴修されます。

このたび私は茨城県代表として、四月十四日に御忌唱導師を嚴修することになりました。私には身にあまる光榮であり、正定寺檀信徒一同の此の上もなき榮譽であります。さぞかし当山開基の土井利勝公も、お喜びの事と思います。信仰篤き土井利勝公があったればこそ、今日の此の光榮と名譽が与えられたのです。

つづく十五日は東京の田丸上人、十六日は秋田の伊沢上人が御忌唱導師を嚴修致します。

過日は九十才の椎尾弁匡法主より教書と御言葉を戴き有難く思いました。なお里見執事長、村上、前田、吉井、各上人、茨城教区教務所長藤原上人よりも種々御配慮にあずかり、感謝している次第であります。私は今回、自作の油絵六十号の風景画一点を、増上寺に寄贈致しました。人の心を楽しくすることが出来得るならば幸いです。

お浄土の 母は、えむや 法然忌

御忌の鐘 兄弟僧が 母忍ぶ

大らかに 鐘鳴る御忌の 増上寺

春うらら 四五羽の鳩が 肩に手に

鳩乱舞 残りの花の 枝かすめ

新会員紹介

東京都品川区東戸越二丁目(支部)行 慶 寺

” 台東区蔵前四の一二の五 中野 隆邦

” 大田区田園調布四 (維持) 秋元 朝吉

川崎市井田一、二〇七 白石 弘

神奈川県厚木郡下津古久五二六 小幡 麟瑞

横浜市西区南浅間町七二 斉田 六郎

” 神奈川区白楽一〇〇 中出 政司

横須賀市上町三ノ三八 中出又七郎

千葉県勝浦市出水一二九七 大日方泰明

仙台市八番丁雨宮「如春寮」 樋口 雅世

秋田県本荘市花畑町六二 蓮 化 寺

青森市長島緑町八五 成田 栄心

山形市銅町一の三ノ二一 江ノ目達雄

室蘭市御前水町三傘社宅一一一 上田 勤

静岡県松崎町松崎 常 泉 寺

豊川市光輝院町の四五 (支部) 光 輝 院

三重県松阪市中町二〇二三 清 光 寺

広島市三滝町四〇〇 長 安 寺

大阪市浪速区恵美須町三ノ四〇 海 泉 寺

大阪府三島郡三島町鳥飼中 長 音 寺

神戸市長田区久保町一丁目 多々良静子

長崎県新魚目町浦桑 青柳 浄音

余地のある生活

宝田正道

(中央公論社 自然編集長)

一丈の堀を越えんと思わん人は、一丈五尺を越えんと励むべし。

——法然上人「常に仰せられける御詞」

四月といえば、すぐ花祭のことを思い出す。

いわずもがな、わが釈尊降誕の佳き日であるが、宗祖法然上人は、この前日の四月七日が誕生日である。今月から、毎月一句乃至二句の金言、或は格言、名句、座右銘といった類いのものを、古今の高僧、偉人、英雄等の吐いた言葉の中から適当に選び出して、人生を歩む一つの指針にしてほしい、という注文が私に与えられた。大変光栄で、分にすぎた大役でもあり、私のような浅学菲才の者にそれが十分つとまるとも思えないが、幸い、読者の多くは浄土教になじみ、仏教全般にも深い理解と知識をもつ方々という話なので、できるだけ気楽な世間話をするつもりでお引受けすることにした。なるべく法然上人を中心とした念仏の先達たちの言行から、今日的に意義の見出しやすいものを選んで、毎月、こ一緒に法味を味わってゆきたいと思う。

最初に、法然上人のこの言葉を選んだのは、上人の誕生日に因むと同時に、四月は新学期が始まり、就職組の若い学生諸君は制服を脱いで社会に出てゆく、人生のスタートの時期でもあるし、年度がわりで自然も社会機構もすべて清新の装いをこらす、それにふさわしい銘句と考えたからである。

文意は、あらためて註釈を施すほどの難しさはなく、しいて若い人々のために云えば、一丈は昔の尺貫法の単位で十尺、つまり三メートル強の長さと考えればいい。だから、かりに三メートルの堀を飛び越えようと思ったならば、少くとも四メートル半くらいの堀を飛ぶつもりで、より一層余裕のある力を蓄えよ、というほどの意味である。

これは、むしろ、次に「往生を期せん人は、決定の信をとりてあい励むべきなり」と続くように、法然上人としては、念仏して極度に往生するという信仰の確固たる裏付けを得させるための激励のお言葉である。しかし、われわれ日常生活の上でも、結局、何事をするにも確実で、余裕のある行動をとることが大切であると教えられたものと思う。

人生万事、ギリギリの胸算用で、余裕のない歩き方をするとろくなことはない。南北朝時代の中国の学者で、顔之推^{がんしすい}という人がいる。

人間いかに生きるべきかを、儒仏両教の調和的立場から説明しようとして『顔氏家訓』という書物を書いたが、その中に、

人間の足が踏む広さは、わずか数寸に過ぎないのに、一尺ほどもある路で、きまつて崖からつまずいて落ちるし、一抱えもある丸木橋で、必ず川に落ちて溺れるというのは、なぜか。そのかたわらに余地がないからである。(名実篇)

という一節がある。まことに含蓄のある言葉で、われわれは、例えば家計のやりくりでも、とかく貰っただけの月給全部をあてにして使いこみ、何の余裕もない暮しを送りがちである。常に足の裏一杯の巾しかない丸木橋を渡るような危険な真似をするから、ちょっとした突風でも吹くと(病氣とか事故とかに出あった時)忽ち身の平衡を失い、河中に顛落の憂目にあうことが多い。余裕のある生活をしなくとも給料が少いから仕方ない、とこぼす人があるかもしれないが、それは生活の工夫

が足りないからである。苦しい中から少しでも余地を残すという蓄財精神が必要なわけである。

心にも余地を残すことは大切である。寛容ある態度を持するには、ふだんから多少の修養も必要であるが、例えば商取引の場で、相手の無理解、傲慢さに思わずカツとなつて、せっかくの商談がおじゃんになったり、外交交渉につい感情が出て喧嘩口論の末、互いに傷害を受け、大きくは戦争というような大事をひき起したりするのも、その時にぐっとこらえる忍耐とか思慮分別のゆとりがないからである。心に度量の余地があれば、当然こういう危機は避けられる問題ではなからうか。「ならぬ勘忍するが勘忍」というのも、こういう時のためのいましめである。

日本人は、昔から余地を残すのに巧みな国民であった。いわゆる余白の美を絵画や詩文や建築様式に表現して、心に余裕のある点を尊んだ。最近では、都会生活に全くその美しさが失われて、どこもかしこも息抜きの余地など全くなく、火災や地震の際に身を避ける場所さえ、ギッシリ家並に占領されて、心を自

然に遊ばせるゆとりもない生活が多い。一丈の堀を越えるのに、一丈だけしか考えない。これでは丸木橋から落ちる結果をまっぴかりである。世の中が忙しくなればなるほど、われわれは、精神的なゆとりの工夫を考えて、約束の時間には少くとも五分前にゆくというエチケットの原則を、すべての生活の基本態度にしたいものである。生存競争の激しい昨今、一丈の堀に一丈五尺、すなわち五尺の余地をたえず踏まえた処世観を忘れるなかれ、と教えられた法然上人の尊い教訓は、いろいろな面で生きてくるにちがいない。

業界一の銅瓦葺専門店 広告の責任重し
何代も研究せる卓越せる技術は他所の出
来ざる価値ある技量と優美頑強安価を誇
る赫々たる定評ある当方へ。建設者請負
業者も他所の倍以上保つと他の広告に迷
わず遠方でも是非とも設計相談乞無料

銅瓦葺協会
相談役顧問
設計及監督

石 黒 工 業

東京都文京区春日一丁目九の二八
電(八一二) 一五五一

信玄と家康の念仏（二）

鶴田湛泉

三

駿河に風流踊りという奇妙な踊りが流行し初めたのは、永祿十年の稲穂もふくらみ始めた頃であった。

この踊りは、人々の耳目を驚かすばかりの大げさなものとなって行った。

八幡の鄙た片田舎から初まったこの奇妙な踊りは、踊り子達が昂奮のあまり隣の村へ踊りに行くと、人々の興味をそそったのか習い覚えると又その村から踊り返して来て、それ

が又近郷の村々へと燎原の火のように拡まり行つて、またたくの間に駿河一国を踊り一色にぬりつぶして行った。

始め農民の若い男女が、豊作を祈願して始まったこの踊りは、近郷の村々へ拡がって行くうちに市中に踊りかけられ商人が加わり、市中の商人から次に武士にかわつて、武士は駿府城へと踊りをかけたのである。

駿府に踊りが流行するようになったそもその理由は、氏真が性来踊りが好きだった

上、寵臣の三浦がすすめたからたまらない。国中の郷民、己が家業をすてて踊りに熱中するようになったのである。

その服装も初めは軽装であつたのが、日と共に華美となり果ては衣装比べとなり華麗豪華を我一と競うようになって、金らん、どんす、唐織と高価なものを身にまとつて、飾り物も金銀珠玉目もさめるようなものを用いるようになった。いわば豪華な仮装舞踊であつて、京都の富裕な町人によつて初められたこの風流踊りは、没落しかかった貴族も参加したので、手振身振も一層豊かさともみやびやかさを加えたものとなつていた。

糸竹金鼓の調べは天地に轟き渡り、踊りのルツボの中に魅せられたように踊り狂つて八月一杯踊りぬき、九月に入つても止みそうもなく、いつ踊りが果てるとも思われなかつたが、明年は更に盛大に踊り抜こうと申し合せが出来て踊りがやつとやまつたのは、秋も深まり寒冷が加わつて農家も刈入れに多忙になろうとする九月下旬であつた。

翌年田植が終ると、待ちかねたように早くも踊りが始まつた。七月中旬になると、武士

と云わず百姓と云わず町人も、家業をうちず
て他人に劣るまいと踊りの仕組、衣裳選び
にうつつになつてその他の事は手につかぬ有
様であつた。

その夏、三浦が駿府の法大寺の広大な境内
で催した踊りは、全く前代未聞と噂された。
衣裳はいずれも綾羅錦繡と美麗を尽したのは
云うまでもない。髪は男女とも金紙銀紙でつ
かね、文字通り老いも若きも思い思いに着飾
つて、けんらんたる輪を幾重にも描いて夏の
夜を踊り狂つた。

氏真は、風流を極めたはなやかな衣裳をま
とい頬かぶりして、高く組まれたやぐらの囃
子方の中に混つて太鼓をうっていた。勿論三
浦も、手拍子足拍子とつて踊りの輪の中で狂
つたように踊っていた。

（館様の太鼓で踊るとは、何と果報なこと
よ。後の世の語り草となろうよ。踊らぬは末
代までの恥辱）

とばかり、笛と鉦と太鼓の賑わしい音頭に
合わせ、歓喜にみちた没我の境に陶醉してい
た。その費用は、一夜といつても莫大なもの
であつた。

踊りの衣裳をととのえるために有金を使い
果した武士は、家重代の一刀や甲冑に至るま
で売り払う者もあり、武具、馬のたぐいまで
質物となすに至つた。

（いまは天下が戦国であるから、すべての
ことをなげうつて、武具をととのえて置くこ
とが必要である）と、信玄が己が家臣に訓め
ている言葉とは雲泥の相違である。

秋になつて踊りが止んだが、逸楽気分を忘
れかねた武士や町人は、猿楽役者を自宅に招
いて笛や太鼓の吹き方や打ち方を学び、踊り
の稽古に日夜を分たぬ有様であつた。

そのため笛や太鼓の需要がふえて価が日に
日にはね上り、その反対に甲冑の価が下ると
云う戦国時代として想像も及ばぬ奇怪な現象
を呈していた。

修奢が上下に滲透してしまつた結果、かり
そめの会合にも、山海の珍味の膳が設けら
れ、酒が廻ると習い覚えた笛や太鼓を自慢げ
に舞えや謡えやと夜を明かしていた。

頽廃し切つた世情に心ある者は、この後、
今川家はどうなり行くであらうか、或はこれ
は今川家滅亡の兆ではあるまいかと、眉をひ

そめ唇をかんで憂いていたのは勿論である。
事実、風流踊の囃子は、今川家凋落の機が
刻々に迫っていることを告げる挽歌でもあつ
た。

四

氏真が修奢に耽つた結果、当然財政の困難
を来たすこととなつて、これがため三浦は不
当な法度を設けて重税を課さざるを得なくな
つた。こうなると、民疲れ國中疲弊しますま
す政治が紊れて庶民の怨を買ふこととなるの
は当然である。

三浦の余りの専横と放埒さに、旧功ある今
川家譜代の老臣さえ彼を嫉み怨んで彼を見限
り、二心を抱いて敵に内通する者さえ顕われ
初めた。

こうした今川方の政情は、密偵によつて逐
一信玄の許に報ぜられていた。

信玄は家臣、初鹿野伝右エ門を氏真の許に
遣して、

「三河の家康は、父広忠の時から今川殿の
幕下に属し、代々恩誼を蒙っているにもかか
わらず、いつしかその大恩を打ち忘れて尾州

の信長に加担しているばかりでなく、今川殿の所屬の城をここかしこ攻め取りて、今は更に遠州まで手を出そうとする形勢にございませぬ。のみならず、今川家に重恩ある被官の者で、家康の勇威におそれをなし降る者すら少なからざる現状であります。このまますて置くときには、近年の中に遠州を家康に攻め取られることはまぎれもございませぬ。とは申しても、只今の今川殿の弓矢を以ってしましては、家康を敵とすることは所詮覺束ないことと存じます。されば座しながら遠州をむさむさ家康に奪われ他家の所領となるよりも、この際心よくわが殿に遠州を賜われよ。さすれば、わが殿信玄公は、遠州を手に入れた曉には、大軍を發して三河を攻めとり、更に尾州の信長に先君義元公の怨を報じましようぞ」と告げしめた。

時勢を見る明のない駄々っ子の氏真は、信玄の強諫にあつても、目の覚めるような器ではない。

父の甲合戦も出来ぬ無氣力な氏真も、虫のよい信玄の申込みに感情を昂らせて、

「何と！ 信玄どの遠州を所望じゃと、こ

れはまことに道理に合わぬおかしなことを承るものじゃ。甥の氏真の所領を奪うがために、巧言を云いつらねて誘うなど奸計もただけしい。全く親族の道にもそむいているではござらぬか。遠州は徳川に渡すことは、氏真もかねがね覺悟しているところとござる。何の伯父とて無理な申し入れ、聞く耳などもたぬわ。その許、帰ってこの旨、入道にしかと伝えよ」

唇をびくびくさせながら、使者を怒鳴りつけて帰した。

氏真に見事峻拒された信玄は、つむじを曲げて、

「何の乳臭い小児の氏真奴、この信玄に對し何たる無礼の言葉ぞ。……いや、いい口実を与えてくれたわ。その儀ならば、一家の好をすて、駿河を追い崩し氏真奴に思い知らしめてくれようぞ」

好機逸すべからずと、報復を決意するに至った。

今川と武田とは重縁の間柄であつたが、義元の妻であつた信玄の妹は既に早く没し、氏真の妹を嫡子三郎義信の妻としていたが、た

またま信玄と義信の間に不和が起り、義信は幽閉され、永祿十年十月三十才で自殺していた。

それ以前に義信の妻は駿府に戻っていたので、信玄と氏真との直接の姻籍關係は、この時全く絶たれていたわけである。

その頃、今川氏に身を寄せていた信玄の父信虎は、今川氏の形勢を遙かに信玄に通じ、更に内部より今川氏の將士を説き氏真に背かしめようと画策していたのであつた。

孟子が「春秋に義理なし」と云っているように、戦国時代に於ては信義などと云うものは全く当てにならなかつた。

昨日の味方は、今日の敵なのである。

權謀術数を必要としていたこの時代にあつても、用兵の術に巧みであり且つ用意周到で計画も甚だ緻密であり、殊に異常な外交家で、孫子、呉子の兵法に似ているとまで評され、川中島で度々戦術を練って日本第一の戦術家と自負していた信玄も、家康の実力を知って味方に引き入れ手を結んで事に當るが得策と考へたのか、武田徳川両家が慫慂を通すべき旨を家康に伝えて來た。

家康を若年であるが語るに足る武将と思つたのは信玄だけでなく、義元を倒して名を天下にとどろかせ、次の天下の実力者と見なされていた織田信長さえ、当時未だ三河一国の領主にすぎなかった微々たる家康を無視出来なかったのか、七才の愛娘徳姫を、同じ年の家康の長男信康に嫁せしめたほどであった。

信長は家康と将来終始交らぬ同盟を結ぶため巨大な楔を打ち込んだわけである。これでは、家康と結ぶことによって三河から後を突かれる後顧の憂いがなくなったのみならず、上杉氏への押えも出来たわけである。一方家康にとっては、今川氏との旧盟の繋りを切ったことを意味する。

その頃、今川氏の所領は、既に東よりは北条氏康氏政父子に侵され初めていた。

氏真の居城駿府を目指して信玄が兵を率いて甲府を出発したのは、永祿十一年十一月六日であった。

信玄に呼応して立ち上った家康は、ほぼ時を同じうして、西より遠江を攻略し初めていた。

信玄は天下把握の雄図のためには、弱きを押し倒し領国を奪い取るのが戦国武士の常識と割り切っていたかも知れないが、家康の考へは、信玄よりも、もっと大きな高いところにあつたかも知れない。

信玄が讃嘆していた如く、常に寺に詣でて浄土の法門をきいていた家康のことであるから、大樹寺の登誓天室上人から、「無量寿経」に説かれている。

『天下和順し日月清明なり、風雨ときを以つてし災癘おこらず、国ゆたかに民やすくして、兵才もちいることなし、徳を崇め仁を興して、努めて礼讓を修む』

の仏の言葉を度々きかされて、これを無上の教えと受けとり、いつ果てるとも知れぬこの乱世を、和順の楽土に築き上げようとの悲願に、若き血潮が燃え立っていたかも知れない。

今川氏の居城たる駿府城が、武田勢に焼き落され氏真が掛川に逃れ去ったのは、その後間もないことであつた。

この時、氏真の夫人は輿に乗る暇さえなく、命からがら徒歩で落ちのびたという。

真野正順博士著

定価 一二〇〇円
送料 一〇〇〇円

仏教における

宗観念の成立

第一篇 印度篇

第一章 原始仏教に現われたる教団意識

第二章 分数の分派と宗義

第二篇 中国篇

第一章 中国仏教における「宗」観念の発生

第二章 中国における「宗」義とその限界

第三篇 日本篇

第一章 奈良平安朝の「宗」観念

第二章 鎌倉時代の「宗」観念

◎本会で取り継ぎいたします。

おことわり

「現代社会の動きと宗教の役割」(座談会)

誌面の都合で五月号に第四回を掲載させて頂きます。

日本浄土教物語（4）

平安末期の浄土教

鈴木成元

（大正大学講師）

源信について浄土教發達の上に功績のあったのは永観ようかんである。彼は禪林寺に住んで三論の講義をし、また熱心に念仏を勧めていた学者として有名であるが、康和二年（二〇〇）東大寺に住し繁榮復興のもとを築くという政治的手腕も持っていた人である。彼は病弱ではあったが、実行派で、常に獄に赴いては囚人の苦をあわれみ説法受戒し、人に物を貸して返せないものには念仏をさせたという。今でいえば教誡師と民生員を兼ねた人であった。壮年時代は日に一万遍、以後は六万遍の念仏行を實踐し、晩年は舌が乾き咽が涸れてしまつて觀想につとめたという人だけに、迫力に満ちた生活態度であつたに相違ない。勿論そこには經濟的に恵まれた一面を見落とすことはできない。

念仏行の實踐もさることながら、より大きな業績は承暦三

年（二〇九）作の『往生講式』と康和五年（二一三）作を伝えられる『往生拾因』の著作であろう。『百鍊抄』『中右記』『台記』『玉葉』などには「往生講」「阿弥陀講」のことがかなり見えているので、非常に流行していたことがわかる。さらに一心に阿弥陀仏を称念すれば、十因があるので必ず極樂に往生すると証処づけたのが『往生拾因』であると考えてよい。こうして永観は学行ともに勝れた足跡を残したのである。

融通念仏の祖といわれる良忍は、手足の指を切り燃し、睡眠を絶つて毎日六万遍の念仏を称えながら九年間仏經を供養したところ、三昧の中に「一人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行、是名他力往生」という弥陀の示現を蒙つたという。叡山の東塔東谷の阿弥陀坊で雜役をつとめていた良忍であつたが、晩年大原に隱居し、自信をもつて道俗貴賤

老若男女に念仏を勧めた。一宗となったのは江戸時代の中期であったが、当時かなりの信仰者があったらしい。

『古事記』によると、白河院女房の尾張局は止観を読むために童女を連れて大原に通い泊るのが常だった。ある時、良忍の読経が終るのを待っている間、ふと考えた。それは自分が寺に泊



(永観堂風景—禪林寺)

することは良忍に悪名の立つもとである。以後参詣するのはやめようと。

読経の終

った良忍は彼女をみるなり、学問をなまけてはいけないうったという。そこで彼女は出家して大原に住み、大檀那になった。『元亨釈書』や『十訓抄』など多くの書の中にも待賢門院の宮人などがよく参詣した記事がある。どうも良忍にはかなり身分のある女性の帰依者が多かったように思われる。昔から「遠くて近きは……」など世間ではよくいうが、そん

な浮いた気持ではなかった。学問の世界は厳しい。

この時代は数によって信仰を表わそうということが流行した。『百鍊抄』によると、白河法皇は保安三年(二三)法勝寺において三十万の小塔供養を行った。『中右記目録』には天治二年(二三)藤原忠道が小塔千基を待賢門院に獻じ、三条殿で供養された記事がある。これは『無垢浄光大陀羅尼經』による思想で、これを行うことにより一切の罪障が消えるという。だからその目的も安産・病氣・戦没者など種々である。また世間でお百度参りというが、『宇治拾遺物語』には二度詣の賭事が出てくる。これは双六すごろくによって観音様の御利益を賭けたものである。その他『阿弥陀經』『般若經』などの転読・書写をはじめ、卒都婆・摺仏など、あらゆる分野に及んでいる。

従来このような信仰は墮落した証処であるとされてきた。

なるほど数が多ければそれだけ御利益があるという確証はない。しかしこれを簡単に墮落化したときめつけるのは早計であろう。現代から考えれば不合理極まるものであり、馬鹿らしいことではあるが、当時の人々はそう思っていなかったろう。信仰の尺度というが信仰自体の内容にもいろいろと意味があるろう。仏教が進展し、分離して行き、今日のようになるにはぜひ経過しなければならぬ一過程であったことを忘れ

てはならない。それが歴史学の教えるところである。

それはそれとして、浄土教の中にもこの数で表現する思想は普及した。毎日五万遍とか六万遍の念仏を称えるとかいうのはそれである。『台記』をみると、藤原頼長は、久安六年（二五〇）ころ百万遍を日課としていたし、『玉葉』によると兼実も三十万とか百万遍と書いてある。浄土宗の日課数珠は大へん便利で八万遍の計算ができるようになっていた。頼長や兼実もやはり数珠で数えたらうと思われるが、何にしても一日一人で三十万とか百万とかいうのは無理である。一秒間に一回称えたとして一日二十四時間称えて八万六千四百遍、二倍のスピードにして一七万二千八百遍である。寝る時間も必要であろうからそうはできない。日課となればなおさらである。何人かあるいは何十人かを集めて念仏をし、その合計をいったものである。現在でも十夜とか彼岸などに百万遍の数珠くりをする。現在では数の多いというところに比重があり、正式に数えてやっているのかどうかかわらないが、当時のものは、ただいい加減の数をいったものではないであろう。

この数量の念仏に小豆念仏あづきというのがある。これは数珠の代りに小豆で数えるものである。『元亨釈書』によると、飛鳥寺の近くに住んでいた願西は、小豆千石分の念仏を称えよ

うと十数年間続けたが、天承元年（二三）七百石に達したとき往生した。また鞍馬の重怡は、十四年間小豆念仏をやり二八七石六斗余に及んだという。

私は一昨年古灯笼をみる目的で鞍馬に登った。青銅の灯笼はさすがに立派なもので舌を捲いた。その時本堂の下手にある阿弥陀堂に抽選の時などにみかけるガラガラ廻す機械のようなものをみた。これは丸い車輪で中央に大字で南無阿弥陀仏と、左右に小字で九九九の名号が彫ってある。上に手をあて一回転すると千遍の念仏をしたことになる。こんな天狗さんの道場にどうしてあるのかと不思議に思ったが、古くから由緒があったのであろう。異国に行つて知人にあつた思いがし、そばに書いてある説明文を読みながら一生懸命廻してきた。同行の学生諸君も汗を流したので、数十億の念仏を称えたことになる。その御利益が無事山越をして貴船きふねまでたどりつけた。

前にもものべたが、この時代の念仏は特定の人に限られたものではなかった。仏教界全般にわたるものであり、流行の先端を行つたものと思われる。律宗の大徳といわれた中川の実範が浄土教に通じていたことは凝然の『浄土源流章』でもわかるが、実範は『病中修業記』を書いて決定往生の用心を示している。つまり彼は阿字観を利用して西方極楽の阿弥陀仏

を見させようとしているのである。この思想は弟子の貞慶をはじめ、真言宗の覚鑊に大きな影響を与えた。覚鑊の特色は真言教学の中に浄土思想をとり入れたところにあるが、これは実範の影響ばかりでなく当時の必然性にもよるのである。彼は『一期大要秘密集』を書き九品に分類して、決定往生を



山越阿弥陀像 金戒光明寺蔵

示した。さらにそれは発展し道範の『秘密念仏鈔』となっていくのである。これらは書名は異なるがいずれも臨終の行儀を説いたものである。臨終行儀のはじめは善導の『臨終正念訣』で、簡単なものではあるが日本に入り大きな影響を与えた。源信は『往生要集』で早速とり上げ、さらに拍車をかけたの

である。何宗であろうと臨終は大事である。それが浄土教の勃興と相俟って実範に受け入れられ、いろいろと改作されたのであるが、目的は全く同じである。当然浄土宗においても大切にされたのである。法然は他人には進めたが自分では行わなかった。しかし、社会そのものが要求していたので、良忠のときになると『看病用心鈔』という名で大成されるのである。良忠は前述の諸師のエキスを採用し、十九カ条の項目に分けて、臨終のせまった重病者に対する注意をまとめあげた。これは一見何でもない常識のようにとれるけれども、当面した人には考えつかないことが多く、七百年の年代は過ぎても教えられる面が多い。

この他珍海の『決定往生集』、重誉の『西方集』、覚鑊の『孝養集』など、三論・東密の学者の中には念仏に通じていたものが多い。それが実際に生きる学問のあり方だと思ふ。何宗の教義はこうであるから、そんなことをしてはいけないという考え方は後世のもので、実際に行われている信仰は、そんな観念的なものではないのである。どんなに立派な考えをもっているても、それが実行されなければ何にもならない。さらに良い面はとり入れ、悪い面は捨てなければならぬ。事実そうやってきたのである。それを認識しなければならぬ。

== 介 紹 ==

法然の後継者も遺跡も定めなかった。そこで法然が入寂すると、数多

新 刊

くいた門弟達は、自分こそ真の後継者であるという自信を強め、諸方に

新 刊

散らばって念仏布教に専心することになった。しかしその中心は京都に

==

いた信空・隆寛・証空・源智などであるが、九州に下った聖光と陸奥に

下った金光の功績を忘れることはできない。

法然門下の研究は早くから行われ、著るしい進歩を見せているが、金光については全く白紙の状態であった。それは良質の材料不足が最大の欠点で、したくともできなかったのである。つまり従来からの伝説を通して推察するより他に方法がなかった。

ところが昭和二十四年、五所川原市の和田喜八郎氏が糠塚沢附近で炭焼釜の造築中、偶然にも洞窟を発見、経筒の中から金光に関する新資料を見い出すことができた。このため当時は大変な話題になったが、月日とともに忘れられかけていた。ところが去る三十五年佐藤堅瑞氏が『金光上人の研究』としてその成果を発表され、昨年また開米智鎧氏が『金

光上人』と題して、二八八頁にわたる高著をもつたことは喜びにたえない。

開米氏はもとより熱心な金光信者であり、老齢にもかかわらず十数年の間、この新資料の研究に打ち込んで、まとめあげたものである。内容は金光の出生から入寂までを、時代的背景を盛込んだ、編年的な色彩の濃いものであり、その後西光院・大泉院などの関係

開米智鎧編

金光上人

編集部

寺院をのべ、附録として資料・略年表をのせている。とりわけ、新資料をそのまま掲載したことは今後の研究に大きな貢献をすることであり、また縁起を中心とした平易な記述法は、金光の伝記を把握する上に便宜を与えている。史的事実の詮索は別として、古人の考え出した金光観は、布教に当る方々にも大いに参考になることであろうし、当時における

信仰の尺度とみても過言ではないであろう。下手な理論を振りまわすよりも、現実に即した布教法がどれだけ価値があるかを問わず語りに物語っているものともいえる。

伝記を書くということは実に難しいものである。自分の過去さえ容易に想い出せないのに、他人の一生を書くのであり、しかも七五〇年も前のことであるだけに、その困難は計りしれないものがある。そして自然科学とは違って完全なものなどできるはずがない。開米氏は序説で「諸彦の高批を仰ぎ、完成は後賢の力に俟つ」といつているが、完成なぞあるはずがない。ここまで作り上げるのが大変なことである。専門的な分野からみれば、古文書・古記録をはじめ縁起の扱い方など、かなり不自然な面も多く見られるが、自分が金光になりきって、委細もろさず記述に努めた開米氏の真面目な態度には頭が下がる。そのことは高く評価してよい。幸い四十一年は金光の七五〇年忌に当たるといふ。最大の贈物ができたことは誠に喜ばしい限りである。

== 新 刊 紹 介 ==

編集後記

○勢至祭り、花まつり、御忌会と、この月はいろいろと行事が賑やかに行われます。仏教徒にとっても、まさに春です。

○新しい企画として、巻頭言を掲げてみました。時代に生きるわれわれの問題を考えてみたいと思つたからです。

○宝田正道先生（中央公論社、自然編輯長）のも、新企画の一つです。大正大学の浄土学を出て、ジャーナリズムの尖兵として活躍しておられます。広い視野と深い造詣をもつて、一年間書さつゞけて頂く積りでのご期待下さい。

○藤井実応先生の信仰問答は、手近なものだけに好評でした。茨城県報国寺さんなどは、もつと頂きたいとこられた。有縁の人々に読ませるのだそうです。

○ハワイでは、開教師の皆さんが、本誌を取つて下さることにになりました。この機会に、投稿もどんどん頂き度いものです。

○渋谷賢応師から面白い法談を、頂いております。「コタツの柱をつかんで凍結を防いでいます」と便りのあつた信州の山にも、暖い春に活気づいていることと思ひます。

○土屋観道師の主催する真生会は、浄土の信仰を實踐する地道ながら力強い信仰運動です。副主幹の土屋光道師は、東大宗教学での新進気鋭の士で、信仰と理論を實踐におしすゝめておられます。その内に、一筆頂けることと思ひます。

○東京での水曜会という若手の研究会では、選集集を輪読しているが、いつも熱がこもつて、夜のふけるのも忘れる程である。浄土信仰について、現代の指針を

打ち出すのだと、大へんな張り切り様である。

○増上寺では六十余人が加行にはげんでいた。近代的な建物の中で、クリクリ坊さんが修行にはげむのも、奇態であるが、現代の実相である。新しい指導者の出世に頂待したい。東京タワーは、これをじつと見つめていた。

○芝学園高校では、今度プールを造るといふので、松本校長はテンヤワンヤであつた。「二十五米でよい」「いや、五十米でなければ笑われる」と騒がれながらも、校長先生の頭を去来するものは、何だろうか。

○大正大学でも、新人生を迎えて、新生の意気に燃えている。学生ホールもよみ返つて美しくなつた。

○西の仏教大学では、文学部ができて、これも大発展これからがいよいよ教学発展の時である。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 四月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和四十年三月廿五日 印刷

昭和四十年四月一日 発行

定価 五十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

発行所 法然上人顕仰会

東京都千代田区飯田町一ノ廿二

電話東京二六二局五九四四番
東京八二一八七番

三大学仏跡参拝研修団募集

○旅 程 東京↓カルカッタ↓ブッダガヤ↓ナールランダ↓カトマ
ンドウ↓ベナレス↓ルンビニ↓クシナガル↓アグラ

↓デソール↓バンコック↓香港↓台北↓沖縄

○日 程 昭和四十年十一月三十日〜十二月十八日

○経 費 三十四万五千円

○参加者 大正、立正、駒沢大学々生及一般希望者三十名

○企画者 飯野川崎トラベル株式会社

○協 賛 大正、立正、駒沢三大学

○申込先 大正大学学生課

東京都豊島区西巣鴨四丁目

○申込締切 九月十五日



梵鐘のトップメーカー
日本一の技術と伝統

梵鐘その他銅合金

記念・贈答用美術鋳物調整承

池上本門寺大鐘 香取正彦作



昭和三十九年九月 謹鑄

口径一・六メートル重量七トン

老 子 の

株式会社 老子製作所

文紋彫刻技術指導 香取正彦先生
梵鐘界の権威
音響指導 青木一郎先生
理学博士 老子次右工門
鋳物師

本 社 富山県高岡市横田511 電話② 0258

大阪連絡所 大阪市北区曽根崎上1-1 電話 (341) 8847

大阪支店は電電公社の接收のため上記に連絡所を開設しました御利用願います